

麝香の匂い

野村胡堂

-

「旦那よ——たしかに旦那よ」

——

盲鬼めくらおにになつた年増芸妓せいぎのお勢せいは、板倉屋伴三郎の袖を掴んで、こう言うのでした。

「ただ旦那じや解らないよ姐さん、お名前なまめを判然はつきり申上げな」
幫間たいこもんちの左孝は、はだけた胸に扇の風を容れながら、助け舟を出します。

「旦那と言つたら旦那だよ、この土地でただ旦那と言や、板倉屋の旦那に決つてるじやないか。幫間たいこもんちは左孝で芸妓はお勢さ、ホ、



ホ、ホ——いい匂いの掛け香で、旦那ばかりは三間先からでも解るよ。お前さんが側へ来てバタバタやつちや、腋臭の匂いで旦那が紛れるじゃないか、間抜けだねエ——

「何て憎い口だ」

左孝は振り上げて大見得を切った扇で、自分の額をピシャリと叩きました。このとき大姐御のお勢が、片手に犇^{ひし}と伴三郎の袖を掴みながら、大急ぎで眼隠しの手拭をかなぐり捨てたのです。

伴三郎の思い者で、土地の売れつ妓^こお勢に対しては、左孝の老巧さでも、二日も三日もおかなければなりません。

「それ御覧、旦那じゃないか」

お勢は少しクラクラする眼をこすりました。二十二三でしょうが、存分にお侠^{きやん}で、この上もなく色っぽくて、素顔に近いほどの薄化粧が、やけな眼隠しに崩れたのも、言うに言われぬ魅力です。

「盲鬼は手で搜^{さぐ}つて当てるのが本当じゃないか。匂いを嗅いで当てるなんて、犬じやあるまいし——私はそんな事で鬼になるのは嫌だよ」

伴三郎はツイと身をかわして、意地の悪い微笑を浮かべております。

これは三十そこそこ、金があつて、年が若くて、男がよくて、蔵前切つての名物男でした。本人は大通^{だいつう}中の大通のような心持でいるのですが、金持のひとりつ子らしく育つていて、人の意見の口を塞^{ふさ}ぐ程度に才智が廻るので、番頭たちも、親類方も、その僭上^{せんじょう}ぶりを苦々しく思いながら、黙つて眺めているといった、不安定な空気の中にいる伴三郎だったのです。

「あら、旦那、そんな事つてありませんワ」

お勢は少し面喰いました。

「でも、俺は匂いを嗅ぎ出されて鬼になるなんか真っ平だよ」

「それじや、もういちど鬼定おにぎめをしようか、その方が早いぞ」

白旗直八しらはたなおは如才なく仲裁説こうさいせつを出しました。昔は板倉屋の札旦那

の伴でしたが、道楽が嵩こうじて勘当され、今では伴三郎の用心棒にもなれば、太鼓も打つといった御家人崩れの、これも三十男です。

「それがいい、それがいい」

雛妓おしゃくや、若い芸妓達さか——力に逆らわないように慣らされている

女たち——は、こう艶めかしい合唱を響かせました。

杯盤はいばんを片づけた、柳橋の清川の大広間、二十幾基の大燭台に八

方から照されて、男女十幾人の一座は、文句も不平も、大きな歓喜の坩堝つぼの中に鎔とかし込んで、ただもう、他愛もなく、無抵抗に、無自覚に歌と酒と遊びとに、この半宵を過せばよかつたのです。遊びから遊びへ、果てしもない連続は、伴三郎にも倦怠けんたいでした。——何か面白いことはないか、と、褒美を懸けて考え出したのが、この頃の子供たちがやる『盲鬼』又は『眼隠し遊び』という、およそ通や意氣とは縁の遠い遊びだつたのです。

この遊びは刺戟的で馬鹿げていて、思いの外皆なを喜ばせました。盲鬼めくらおにが危ない手付きで追い廻すと、伴三郎と直八とそれに帮ほう間の左孝、芸妓大小取交ぜて十人あまり、キヤツキヤツと金魚鉢をブチまけたように、花束を碎いたように、大広間一ぱいに飛廻るのです。

中には、首つ玉かじへ噛り付かれたり、髪を捲むしられたり、わざと畠に滑つて転げたり、きわどいことまでして見せました。板倉屋伴三郎は、それを苦り切つた顔で、実は面白くて面白くてたまらな

い様子で見ているのでした。

「おしゃく 雛妓たちも芸妓も皆な並べて、

「——いっちく、たつちく太右衛門どんの乙姫様は、湯屋で押されて泣く声聞けば、ちんちんもがもが、おひやりこ、ひやりこ——」

と声を揃えて歌いながら数え、一人ずつ抜かして、最後に残つた一人を鬼にするのです。

残つた二人は白旗直八と幫間の左孝、二人共、鬼になりたくてなりたくて仕様のないという人間——雛妓を追い廻して頬摺りするのを鬼の役得と心得ている人間でした。捕まえてさんざん厭がらせをした上、わざと名を間違えると、いつまでも鬼にいられるという術もあつたのです。

二

雛妓たちが若い張りのある声で『いっちく、たつちく太右衛門どん——』を繰り返しました。鬼にされたのは白旗直八。

「そんな間の伸びた——いっちく、たつちく——があるものか。のけ者にされちゃ、白旗様の前めえだがこの左孝が不服だ。もう一度やり直して貰おうか』

「おしゃく 帰間の左孝は大むくれです。『いっちく、たつちく』はたつた二人のうちの一人を選ぶ場合はテンポを伸すか、縮ちぢめるかの違いで、奇数にも偶数にもなり、雛妓達が望むままの人を選ぶことが出来たのです。

て通るよ

お勢は相変らず毒舌です。

「言つたな」

「捕まえられて頬つぺたを嘗められる方が災難さ。な目隠しが低い鼻の上へずつこけて選み討ちに捕まえるんだもの、やり切れないよ。御覽よ、先刻お前さんに嘗められたお駒ちゃんの頬が、火膨ひふくれになつたじやないか」

お勢がズケズケとやりながら、一番若くて美しい芸妓お駒の頬を指すのでした。

「へッ、自分が嘗められないんで口惜しかろう」

「呆れたよ」

際限もありません。

「もう宜かろう。二人が噛み合っていると際限もない、——鬼は二人の方が面白いから、左孝も鬼になるがいい、その代り灯あかりを消して捕まえるんだ」

伴三郎はこんな事を言い出します。

「それ、旦那があんなに仰しやるじやないか。鬼になるのは私のほとけしょうような仮性の者に限るとよ」

左孝と白旗直八は背中合せに立つて目を縛り、同時に広間中の灯を皆な消しました。

めんないいちどり、手の鳴る方へ、——

丸くなつた男女の輪が、ドッと崩くずれると、それを追つて二人の盲鬼が、手拍子と、哄笑と、悲鳴の中を泳ぎ廻ります。

いつの間にやら伴三郎は席を外し、お勢もお駒も見えなくなりました。左孝の悪ふざけに驚いた女共は、縁側へ、次の間へ、廊

下へと灯^{あかり}を追つて溢^{あふ}れ、それを追つて二人の鬼は、薄暗い中をどこまでも、どこまでもと追いすがります。

が、しかしその歓樂も尽きる時が来ました。恐ろしい血の終局^{カタストローフ}が、熱狂した興奮から、氷のような恐怖へ、十幾人の一一座を叩き込んでしまったのです。

「わッ、た、大変ッ」

下女の上ずつた声が、次の間から響くと、恐ろしい予感に、騒ぎは水をぶっ掛けたように鎮まりました。

「来て下さい、大変ッ」

続いてもう一度。

「――」

十人ばかりの妓は、一瞬闇の中に顔を見合せると、物をも言わずに隣りの室へ突進しました。

「灯^{あか}り」

真先のお勢が叫ぶと、二つ三つ先の部屋に片づけた燭台が誰の手からともなく次の間へ運ばれます。

「あッ、白旗の旦那だ」

驚いたのも無理はありません。御家人崩れで、今こそ幫間^{ほうかん}とも用心棒ともつかぬ事をしておりますが、まだまだ腕^{わき}節には自信を持った白旗直八が、盲鬼の目隠しをしたまま、自分の脇差^{わきざし}で後ろから頸筋を縫われて死んでいたのです。

三

歓樂^{かんらく}の馬鹿騒ぎは、重つ苦しい恐怖の騒ぎに変りました。

階下^し

で呑み直す支度をしていた伴三郎も、左孝の悪巫山戯を逃避して廊下で涼んでいたお駒も、重い緊張した顔を持つて来ました。

「左孝はどこへ行つた？」

「先刻から見えないぞ」

この騒ぎの中へ、剽輕者ひょうきんものでお先つ走りの左孝が顔を出さない筈はありません。

「あいつだよ、平常ふだんから白旗の旦那と仲が悪かつた」
お勢です。

「馬鹿な事を言っちゃならねえ、人が聞いたらどうする」

清川の主人の喜兵衛が駆けつけたのです。

「ここだよ、ここにいるよ」

下の方から男衆の声が聞えました。

「何がいるんだ」

「左孝師匠の死骸はここだよ」

「あッ」

二度目の変事に度を失つた人々は、雪崩なだれのように二階から駆け降りました。石燈籠いしどうろうの灯のほのかに照らした中庭——、一畳敷もあろうと思う庭石の上へ、目隠しをしたままの左孝が、叩き付けられた蛙かえるのように伸びて、見事に眼を廻していたのです。

「番所へお届けだ」

「いや医者が先だ」

深刻になり行く騒ぎの中へ、ガラツ八を従えた錢形平次と、お神樂かぐらの清吉を従えた三輪みのわの万七と、何と言うことか、裏と表から、いっしょに清川の敷居を跨またいだのでした。

「お、錢形の、又逢つたね」

「番所に居合せたんでね、三輪の」

平次はそのまま引返そうとしました。

「ちょうどいい。銭形の兄哥には負け続けだ。仕切りから念を入れて、一緒に手を着けたら、満更負けてばかりもいないだろう。一緒に敷居を跨いだのをきっかけに、この殺しを一人で扱つて見ようじゃないか」

「——」

三輪の万七は大変なことを言い出しました。

「盲鬼を二人やつつけるなんざ、大して企らみのある仕事じやあるめえ。夜の明ける前に下手人を挙げたのが勝ということにしちゃどうだ」

「——」

「こんど負けたら、俺は坊主になる」

万七はこうも言いました。

「あっしも銭形の親分が負けたら坊主になりますぜ、三輪の親分」
ガラツ八はたまり兼ねて口を出します。

「坊主つ振りはいいだろうな、八兄哥。^{あにい}とんだ罪作りだね、フ、
フ、フ」

万七の舌は毒を含みますが、貫禄の違いでガラツ八の八五郎もその上応酬が出来ません。唇を噛んで、少し金壺^{かなつぼ}な眼を光らせました。

「三輪の兄哥の前だが、企^{たく}らんだ殺しなら、すぐ解るが、相手が目隠しをしたのを見て、急に殺す気になつたのだと、こいつは容易に解らないぜ、——とても一と晩じや」

平次は首を振りました。偶發的^{ぐうはつてき}に機会を掴んで決行された殺し

は、理屈でも手掛りでも、手繕りようのないのが普通だったのです。

「とにかくやつて見よう。白旗直八は身を持崩^{もちくず}しているが、元が元だから、女や子供に殺される人間じやねえ。左孝を二階から突き落したのと同じ人間なら、すぐ解る筈だ」

万七はそんな事を言つて左孝の手当てをしている部屋へ行きましたが、打ちどころが悪かつたのか思いの外の怪我、まだ正気に戻つてはおりません。

「八、皆なの身許を洗つて来るんだ。白旗直八や左孝は言うまでもねえが、板倉屋伴三郎の女出入り、——世間で評判を立てているお勢との仲や、その他の事も、解るだけ洗つて來い。町内の髪結床と湯屋と、番所と、板倉屋の向う三軒両隣を当つたら、殺しの筋だけでも恰好がつくだろう」

「合点、そんな事なら朝飯前だ」

ガラツ八は飛出します。

その後ろ姿を見送った平次は、静かに二階へ登ると、主人喜兵衛に案内されて、何より先に間取りの具合を見るのでした。

「燭台^{しょくだい}はどこに置いてあつたんです。板倉屋の旦那はどこにいました」

矢継早な平次の質問を浴びると、

「待つて下さい親分さん。私じや解りません、お勢を呼んで来ましょう」

喜兵衛は兜^{かぶと}を脱ぎます。

「お勢も呼びたいが、——その前に訊きたいことがあります。板倉屋の旦那は、鬼ごつこの途中で階下へ行つたんですね」

「三輪の親分もそればかり気にしていましたよ、——板倉屋の旦那が二階から降りたのは、二階の広間の灯りが消えてしばらく経つてからで、死骸を見つけるほんの少し前でしたよ」

「別に変った様子は？」

「いつもの通りで、——やれやれ追い廻されるのも樂じやない。下で落着いて一パイやるから、そつとお勢を呼んでくれ——と仰しゃいましたが、お勢を呼ぶ前にあの騒ぎで——」

「板倉屋の旦那と、白旗直八とは、仲が良くなかったという話もあるが」

平次の問は次第に突っ込みます。

「勘当された札旦那の次男を、義理に絡んで引取ったのですが、用心棒とも朋輩ほうばいともつかず併れて歩きました——」

「いざれ面白くない事があつたとすれば、鞘當さやあて筋だろう」

「へエ——、どちらも若くて男がよくて、お金のあるのと、腕の立つのと、我儘なのと、少し悪党がつたのですから、女は迷いますよ」

喜兵衛は当らず触らずの事を言いますが、伴三郎と殺された直八の間が、案外世間で見るよう無事なものでなかつたことは事実のようです。

妓共おんなどもは大小こき交ぜて、吹き溜りの落椿おちづばきのように、広間の隅っこに額を突き合せ、疑いと悩みと不安とにさいなまれた眼を見張つておりました。

四

「お勢、——お前の知つてゐるだけを、みんな話してくれ。隠したり、庇かばつたりすると、白旗直八は浮びきれないよ」

銭形平次は、隣りの部屋に一人ずつ呼んで人と人との関係やら、宵からの馬鹿遊びの始末を訊いております。

「親分、これでみんなですよ。あとは何にもありやしません」
お勢の妖艶な顔も、さすがに蒼く引緊つて、日頃の寛闊さは微塵じんもありません。

「板倉屋の旦那の物好きで、盲鬼めぐらおにを始めた、——板倉屋は鬼になるのを嫌つたが、左孝は何んべんでも鬼になつた、——不思議なことに白旗直八は鬼が当らなかつた——と言うんだね」

「え」

「板倉屋は雲南麝香うなんなんじやこうの掛け香を持つてゐるから、一二間離れていても解るので、遠慮して誰も捕まえなかつたと言うんだろう」

「え」

「それをお前は捕まえた、どうするつもりだつたんだ」

「一度くらい鬼にしたかつたんですよ」

「板倉屋が嫌がると、又鬼定めおにぎをやつたそうだな、それを言い出したのは?」

「白旗さんですよ」

「——いつちく、たつちく——を伸して言つて、わざと白旗直八に當てさせたのは誰の細工だ」

「私ですよ、親分、私がこども達に言いつけたんです」

「本当かお勢、大事なところだ」

「私の言うことでなきや、こども達は聞きやしません」

「燭台しゃくだいを取扱わせたのは?」

「それは板倉屋の旦那でした。暗くした上そつと階下へ降りて静かに一杯やろうと仰しやるん」

お勢の言葉には何の淀みもありません。

「お前と白旗直八とは、他人じやなかつたようじやないか」

平次はどこで聞いたか、こう誘導的^{ゆうどう}な問いを持ちかけました。

今では板倉屋伴三郎の寵者^{かこいもの}で通つていてお勢が、かつて白旗直八に関係があろうとは、誰も知つてはいなかつたのでした。

「どうしてそんな事を？」

「——」

平次は黙つて笑います。が、その自信のある眼差しは、正面からお勢の表情の動きを見据えているのでした。

「でも、五年も前のことなんです——私は一本になつたばかり、白旗さんだつて部屋住みで、長くは続かなかつたんですよ」

お勢は眼を伏せました。旧^{ふる}い悔恨が、チクチクと胸に喰い入る姿です。

「板倉屋はそれを知つていたのか」

「え」

「——」

「でも、板倉屋の旦那はそんな事を恨みになんか持つちやいません。昔の昔の事なんですもの。私共稼業の者にしちゃ一年は十年で」

「——」

平次の眼が依然として和まないのを見るとお勢は淋しそうに首を垂れました。

「それに、近頃は、お駒さんに夢中なんですもの、——私のことな

んか

「そいつは初耳だ、嘘じやあるまいな、お勢」

「嘘なんか言やしません。——そのお駒さんが、白旗さんに気があつたことも親分さんはご存じないでしょう——でもこんなにみんな言つてしまつていいでしようか」

お勢は悲しそうでした。この陽気でお侠きやんな女の一皮下には、妙な悲劇的な情緒じようぢょのあるのを、平次はまざまざと見せつけられたよう気がしたのです。

五

「錢形の兄哥あにい、左孝は口をきいたよ」

万七は得意な鼻をうごめかして、平次を迎え入れました。

「何て言つたんだ、三輪の」

「廊下へ出ると、いきなり、恐ろしい力で突き飛ばされ、欄干らんかん越しに、庭へ落ちたことまでは知つているが、その後は、何にも知らねえ——と

「俺が聞いて見よう」

「それもよからう」

平次は、万七の皮肉な目を背せなに感じながら、左孝の枕元へ中腰になりました。どうやらこうやら、人心地ついた左孝は、まだ纏まとまつた事を話せるような容態ではありませんが、それでも、眼だけは物憂そうに動かしております。

「俺が判るだろうな」

「——」

「お前さんが、二階から突落されたのと、白旗直八が殺されたのと、どっちが先なんだ」

「私の方が先で」

左孝の唇は縛帶ほうたいの中にわずかに動きます。

「どうして解った」

「私が廊下へ出たとき、白旗の旦那は、まだ、女共を部屋の中でも追い廻していました」

「お前を突きおとしたのは、男の手に間違いあるまいな？」

「へエ」

「その時、掛け香の匂いがしなかつたかい」

「とんでもない」

「灯りを消して盲鬼めくらおにが始まつた時は、二階に男が二人しかいなかつた筈だ。板倉屋の旦那と、白旗直八だ。その白旗直八はお前と同様目隠めかくしをしていた」

「へエ——」

左孝はそんな事に始めて気がついた様子です。

「板倉屋でないとすると、白旗直八だ。白旗直八は殺されているんだぜ」

「私も殺されかけましたよ、親分さん、——白旗の旦那が私を突き落した後で、誰かに刺されたとしたら、どんなものでしよう」「それもないことではあるまい。が、白旗直八を怨むのは誰だ」「お勢ですよ、——親分、大きな声じや言えませんが」

「何だと」

「白旗の旦那は、お駒と板倉屋の旦那の仲を持つと思ってこの左孝を怨んでいましたし、お勢は自分の浮気を棚に上げて白旗の

旦那がお駒に氣があるのを妬^やいていましたよ

「フレーム」

筋はよく通りますが、そんな簡単な事で、この事件の謎が解かれるでしょうか。平次は深々と腕を拱きました。

「銭形の兄哥、考えることはあるまいよ、下手人は板倉屋の伴三郎さ。左孝はそれを庇^{かば}つてゐるんだ」

三輪の万七は心得ております。

「そんな事はあるまい」

『いっちく、たっちく』と長々と引伸ばして、白旗直八に鬼を当てたのは伴三郎の指図だ』

「いや、それはお勢だ——お勢がそう言つたぜ、兄哥^{あにき}」

「銭形のにも似合わない。お勢は板倉屋を庇つてゐるんだよ、妓^{おんな}共^{ども}は伴三郎がお勢に言いつけて細工をさせたのを、みんな聞いて知つているぜ」

「フレーム」

平次は完全に万七にやり込められました。

「白旗直八は御家人の冷飯喰いだが、腕は相當に出来てゐる。眼を開いていちや、伴三郎風情に殺される筈はねえ、——それに、居候の癖^{くせ}に女出入りで伴三郎とは仲が悪かつたそうだ」

「——」

万七の言^{もつと}うのは一々尤もですが、平次にはまだ腑^ふに落ちない事ばかりです。

「銭形の、引揚げようか。約束の夜明けにはまだ三刻^{とき}もあるが、俺はここに用事がねえよ」

「えッ」

「今頃は清吉が板倉屋を伴れて、番所へ行つた筈だ。これから行つて一と責め責めて見よう」

三輪の万七の誇らしさ。

「そいつはいけねえ。兄哥、板倉屋は唯の金持の旦那だ、人なんか殺せる男じやねえ。この世を面白くおかしく暮す人間が滅多なことで人を殺すものか」

「相変らず道学の御談義だ。人を殺すに暮し向きの事なんか考えるものか」

「だが、板倉屋と白旗直八は、腹の底では敵同士だと言つたね、三輪の」

「その通りさ」

「なら、ブンブン麝香じやこうを匂わせた板倉屋が、側へ寄つて自分の刀を抜くのを待つている筈はねえ。白旗直八は自分の腰の物で刺されたんだぜ」

平次はようやく鋭い鋒鉈ほこさきを現わしました。

「そいつは何とも言えねえよ、腰の物は鞘さやごと抜いて、どこかへ置くこともある」

「鞘は白旗の腰にあるんだ、そんな筈はねえ」

「とにかく、俺の見込みが違つたら坊主になるまでだ。錢形の、夜の明ける迄が楽しみさ」

三輪の万七はもう一つ皮肉な微笑を残してさつさと出て行つてしましました。

「親分さん、——お願ひですが」

「何だ、お勢じやないか」

平次は思い詰めた女の眼を見ました。

「板倉屋の旦那などのご存じのことじやありません。何とかして助けて上げて下さい」

「何を言うんだ、お勢。俺も板倉屋を疑つてはいるんだよ、ことに」と、俺の方が坊主になるかも知れない』

平次は冷静な笑いに紛らせて、奥へ行きそうにするのでした。

「親分さん、待つて下さい、実は、実は——」

「私が殺しました——なんて言わないでくれ、下手人があなた一人増えると、手数が多くなるばかりだから」

「でも本当に私が殺したら、どうしてくれます。親分さん」

「白旗直八が目隠しをしたままのを刺したのかい」

「え」

「殺すほどの怨みは何だ」

「あの男が五年前のことをペラペラ喋舌しゃべつたばかりに、私は板倉屋の旦那に捨てられそうになりました。これほど口惜くやしかつたら、殺しても不思議はないでしょう」

「よしよし、お前の言う事を本当にしよう。が、縄を打つ前に見せたいものがある。ちよいと来るがいい」

「——」

平次はお勢をつれて、死体を置いた部屋へ入つて行きました。
「頸筋の瘡きずは、後ろから刺したんだ。いいか、ほんのくぼは大変

な急所だが、喉^{のど}や胸と違つてあまり血が出ねえ、——ところで、少しばかりの血が、目隠の手拭の下へ付いているのはどう言うわけだ」

「——

「解らないか、お勢、曲者は、白旗直八が目隠しを取つたところを刺し、何か誤魔化すために、殺してから又目隠しをしたんだ、——死骸へ目隠しをして逃げるような、手の混んだ芸当は、お前に出来るかい——」

「——

「一言もあるめえ。この下手人げしゅにんは、三輪の兄哥が睨んだ板倉屋ばんくわやでもなきや、名乗つて出たお前でもないのさ。まあ俺に任せて置きな」

「親分さん」

お勢は泣いておりました。

平次はもういちど広間に取つて返すと、妓共を一人一人調べ上げて見ました。が、何にも解りません。解つたことは、真つ暗な部屋の中うちで、鬼がどこにいると見当もつかないのに、十幾人唯滅茶ぢやめぢやにキヤツキヤツと言つていたというだけです。

「お駒は？」

「師匠の世話をしていますよ」

まだ一本になつたばかりのお駒が、赤の他人の、初老近たいこもち幫間ひょうまんの世話を焼くのは、余程どうかした心掛けでなければなりません。「あの妓こは、根が優しいから、それ位のことはするでしょうよ」主人の喜兵衛はそんな事を言つております。

真夜中過ぎまで何の変化もなく、檢屍けんしも翌る朝になつたので、

一応妓共を帰そうか——とも思いましたが、若しその中に下手人が交っていると、容易ならぬ手落ちになります。

平次は日頃の遣り口にはない事ですが、素知らぬ顔をして、広間の中に不安におののく一団の美しい群むれを見ておりました。

七

「親分、解った」

「何だ、八」

「夜つびて飛んで歩くつもりだったが、いい塩梅に、子刻ここのつ前まへにみんな解ったぜ」

八五郎の顔、——獲物を咥くわえた狛犬のような顔を見ると、平次はそっと物蔭に呼びました。

「順序立てて言え、まず、何が解った」

「白旗直八は御家人の冷飯食いの癖に、名代の色師いろしだ」

「それは解っている」

「さんざんの道楽で勘当になり、板倉屋にころげ込んだ。さいしょは伴三郎と似た者同士で仲よく遊び廻ったが、板倉屋の寵者おもいもののお勢が、五年前白旗に騙だまされて道行までした事があると解つて二人の仲は次第に面白くなくなつた」

「それも解っている」

「ところが、板倉屋は近頃お駒に夢中で、こんどこそは仮親かりおやを立て、引き祝いもさせて、家へ入れようというところまで話が進んだ」

「ホーム」

「板倉屋の親類の手前、お駒の本当の親は、武家とか浪人とか言うことになつてゐるが、それがどうも細工らしい」

「——

平次は次第に緊張しますが、八五郎の話は委細構わづつづきます。

「それを喰ぎ付けたのが白旗直八だ。親元のよくねえのをブチま
けると言つちや、お駒をおどし、まだ一本になつたばかりで、金つ
氣がないとわかると、色氣の方で行つた」

「フーム」

「白旗というのは、悪い野郎ですぜ、殺されるのは当たり前だ」
「それからどうした」

「お駒は逃げて逃げ廻つた。白旗直八はそれを追い廻して、
板倉屋へ落籍ひきせきかれる前に射落そうとした」

「待つてくれ、そのお駒の本当の親というのは何だ、それを聞いたか」

「それがどうしても解らねえ、——柳橋中を聞いて廻つたが誰も
知らねえ。母親は芸妓げいじやだったが、父親は、大家の若旦那わかよしやだったと
も、武家だったとも——」

ここまで来ると、甚だ頼りがありません。
はなは

「八、お前一と走り番所へ行つて、三輪の兄哥を呼んで来な

「何をやらかすんで」

「ちよいと立ち会つて貰いたいことがある。板倉屋は清吉兄哥に
任せて、ほんの四半刻清川へお顔を貸して下さい——と丁寧に言
うんだぜ」

「ヘエ——」

八五郎には何が何やら解りませんが、親分の平次に言い付けられた通り、とにもかくにも、もういちど深夜の街へ出て行きました。

八

「錢形の兄哥あにき、用事うじてえのは何だい」

三輪の万七は勝ち誇ほこった心持で入ってきました。夜の明けぬうちに、伴三郎に白状させる見込みが立つたのでしょう。

「少し聞き込んだ事があるんだが、一人じゃ心細い、兄哥に立ち会つて貰いてえが——」

「いいとも、だが——無駄だぜ、錢形の、下手人はどう考えたつて板倉屋だ」

「兄哥の見込みをどうのこうのと言うわけじゃねえ。ほんのちょっと、念のために当つて置きたい人間があるんだ」

平次はそう言いながら、たいこもち幫間の左孝の臥ねている部屋へ入つて行きました。しょうちゅう焼酎臭い四畳半に、かなだらい金盥を一つ、美しいお駒が甲斐甲斐しく手拭を絞つては、左孝の額を冷しているのでした。

「あ、親分さん方」

入つて来た平次とガラツ八と万七を見ると、お駒の顔色は動搖どうようします。灯のせいだつたかも知れません。

「お駒、立つて見な、——どこかへ血が付いている筈だ」

「——」

平次の声は峻烈しゅんれつでした。お駒の顔は、紙のように蒼白くなりま

「お前には殺す気はなかった。白旗直八はお前を捕えると、あの部屋に伴れ込み、刀まで抜いて脅かした。言う事を聞かぬと殺すとか何とか言つたろう。お前は思案に余つて、言うことを聞くような顔をし、白旗直八が刀をそこへ置くといきなり取上げて刺した筈だ——証拠はたくさんある」

「親分さん」

「違つてゐるとは言えまい。さア、番所へ來い——三輪の兄哥、聞いての通りだ。俺はこの女を番所へ伴れて行つて伴三郎と突き合せる。兄哥はすまねえが、ほんのしばらくここにいて、怪我人を見てやつてくれないか」

平次は誰にも物を言わせませんでした。スックと立上がると、「親分さん、待つて下さい、それは違う」

怪我人の左孝が重態の床から乗出すのにさえ目もくれず、お駒を引立てて、風の如く部屋の外へ出ました。

「錢形の、待つてくれ」

驚く三輪の万七、続いて立とうとするのを、

「三輪の親分さん、聞いて下さい——私はどうせ助かりそうもない、何もかもみんな申します。白旗直八を殺したのは、お駒じやありません」

瀕死の左孝は、万七の袖を犇と掴んで、苦しい声を振り絞るのです。

「何だ、早く言え」

と中腰の万七。

「白旗直八を殺したのは、この左孝でございます。——お駒などが、とんでもない」

「何だと、いい加減の事を言うと承知しねえぞ」

「今死ぬ私が、いい加減なことを言うものですか、——何を隠しましよう、これはお駒も知らない事ですが、私はお駒のためには
しんの父親——」

「何?」

「お駒は私の娘で御座います」

左孝の言うのは全く思いもよらぬ事ですが、その真実性は万七の腰を据えさせます。

苦しい息の下から話したのはこうでした。

左孝がまだ若くて名ある店の若旦那時代に、芸妓と馴染んで生れたのがお駒だったのです。その後しばらく他国を放浪し、落ちぶれ果てた姿で帰つて来ると、お駒は他所に貰われて美しく育ち、その母親は十年前に死んでおりました。

左孝は、お駒の夢を破らないために、永い間名乗りもせずにきました。父親は大店の若旦那と思わせておくのが、帮間の左孝には、せめてもの慈悲なのです。

そのお駒が玉の輿に乗りかけている矢先、白旗直八はフト左孝の身の上を嗅ぎつけて、お駒を脅迫し、金にも知恵にも余る難題を持出したのでした。今晚も、鬼になつたのを幸い目隠しを外してお駒を隣りの部屋に引摺り込み、刀まで抜いて難題を吹掛けのを見ると、お駒にも知らさずに、父親らしい慈悲の眼を離さずいる左孝は、その後を追つて部屋に入り、直八がお駒を抱え込む隙に、そこに置いた抜刀を取つて、後ろから刺し、息の絶えるのを見ると、何とはなしに下手人を誤魔化すつもりで、ふたたび死体に目隠しをさせ、自分も少しくらい怪我をして、諸人の疑い

の目を免れるつもりで、一と思いに庭へ飛降りたのでした。

「運悪く庭石の上へ落ちて、こんな大怪我をしたのも天罰でございましょう、——三輪の親分さん、白旗直八を殺したのはこの左孝に違いございません。娘を助けてやつて下さいまし、お願いでございます」

次第に弱る気力を励まして、左孝は両手を犇と合せました。死の色の濃くなり行く頬には、必死の涙の跡さえ、糸のように引いているのです。

「よしよし、助けてやる、心配するな」

「それから、娘にはこの左孝が父親だったとは教えないで下さい、——赤の他人に危ないところを助けられたと思って、大怪我をした私を介抱するような優しい娘でございます」

それを聞く三輪の万七も、鬼の眼の涙ほど睫毛まつげを濡らしておりました。

×

×

お駒は番所へなど連れて行かれたではありません。その晩のうちに許された伴三郎と、平次と万七が仲に入つて仮祝言かりしゅうげんの話まで進められておりました。

何もかも見尽して、淋しくあきらめたお勢は、
「八五郎親分のところへ押しかけ嫁に行きますよ。可愛がつて下さいな」

そんな事を言いながら、ポロポロと泣いていました。

「親分、何だつてあの時お駒を連れ出したんで。下手人があの左孝とは、親分には前から判っていたんでしょう」

ガラツ八がこう切り出したのは、その翌日でした。

「あんな細工でもしなきや三輪の兄哥が本当に鬚を切るよ」

「――

ガラツ八は黙つて、この世にも優れた心構えの親分を見上げました。お蔭でこの手柄も、銭形の平次はフイにしてしまつたのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「オール讀物」昭和十一年八月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>